キリスト道講演会（京大会館）（縮小版S2案）

生命の泉

１９８０年６月８日
奥田昌道

小池先生との出逢い　サマリヤの女との対話　文化文明とは次元がちがう　永遠の生命の水
弟子たちの足を洗う　十字架の蔭に泉湧きて　十字架と聖霊　永遠の生命をいただく

●小池先生との出逢い

皆さんよくいらっしゃいました。私は大学では、民法の教授ということになっていますけれども、ここではそういうことではなくて、本当に一人のキリスト者、キリストのものという立場でお話をさせていただきたいと思います。

私は小池辰雄先生に出逢いましたのは今からちょうど20年前になります。先生は１９５９年に「無的実存」という題で話されました。私はそれに触れて、「これが本当の宗教だ。いわゆるキリスト教ではない」と思いました。本当に生命のあふれるような自由があった。何にも囚われておられない。そういう姿に打たれまして、私は小池先生を通して働いておられるキリストのとりこになりました。

私は、いろいろ悩んだことがあります。私も聖霊を受けたら、先生の言ってらっしゃることがわかると。そして、１９６８年頃から何かしらひとつ吹っ切れものが出てきた。

「もう私ではない。自分の信仰とか、立派さとか、熱心とか、そういうものではない。キリストが本ものならば、私を捕まえて引っくり返りして、御業（みわざ）をなさるはずだ」

という思いが湧いて楽になってきて、１９７２年から私は京都で小さな集まりを独立で持つことになりました。時が経つにつれて、語るのが楽しくなってきまして、「自分ではない」ということが本当にわかりました。人が人であるかぎり神の言葉、神の霊によって生きる、それだけでいいじゃないか。私が生きているということは、神さまの霊が、キリストの霊が私を貫いて生かしてくださっている。生きていることがその証（あかし）である。それでいいんだという気持ちです。行き詰まって倒れ伏すようなことになった時、私はキリストに祈ります。

「主さま、あなたは私の生命（いのち）です。あなたは私の力です」

と。祈りますと本当に力がくる。前は講演会というと、足が震えていた。けれども今は、神さま・キリストがなさってくださるから、どうにでもなれと思ってます。

●サマリヤの女との対話

キリストは、

「無条件でいい。何も条件は要らない」

と仰る。そのことをこれから「サマリヤの女」との会話のところで皆さんと一緒に味わいたいと思います。「生命の泉」という題です。時は今から二千年前、ユダヤの地方の「サマリヤのスカル」という町に「ヤコブの井戸」があります。ヨハネ福音書第４章です。

「1さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、2――洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである――3ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

イエスが過ごされたのはガリラヤです。時々、エルサレムへ、ユダヤ地方へ来られたけれども、また帰られた。その途中にサマリヤという真ん中の地方を通らなければならなかった。

4しかし、サマリアを通らねばならなかった。5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、スカルというサマリアの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があった。

イスラエルでは井戸というのは物凄く大事なものです。砂漠の民ですから、井戸は命の源です。そういった井戸をめぐって羊飼いたちがいつも生活をしているわけです。

イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。7サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

サマリヤ人は紀元前8世紀のバビロン捕囚のときにイスラエルに残った者と、アッシリヤ王が植民として送りこんだ異教徒との混血の子孫です。ユダヤではそういう混血人に対しては「穢(けが)れたる民である」と言って、偏見を持っていました。そこで交際はしない。ところが、ユダヤ人であるイエスがサマリヤの女に、「水を飲ませておくれ」と声をかけられた。それでこのサマリヤの女はびっくりした。実はこのサマリヤの女は少々身持ちがわるくて、五人の夫がいたけれども、それももう今どこへ行っているのかわからないという。イエスは親しげに「水をくれ」と言われた。それで怪訝(けげん)に思ったこの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と訝(いぶか)って言った。

10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物(たまもの)を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12あなたは、わたした

ちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

問答がトンチンカンなんですね。キリストが仰ったのは、

「霊の水、死んでも死なない永遠の生命の水、霊水をやる。この井戸水は、ヤコブもまたその子孫たちもそれで命を養ってきた大事な井戸だ。命懸けで守るべき井戸だ。しかし、私が与えようとしている水はそれよりももっと素晴らしいんだよ」

と、仰ったけれども、この女はわからない。

「渇くことがないように、ここに汲みに来なくてもいいように、その水を下さい」

と。これは怠け者の答えですよ。次元がちがいますから、

「あんたでは話にならん。夫を呼んできなさい」

とキリストは言われます。

ここまでのところで非常に大事なことがくみとれると思う。この女の人は身持ちのわるくて、おそらく人々からは爪弾(つまはじ)きされ、白眼視されているような人かもしれません。それがお昼に井戸の水を汲みに来た。そこにイエスが旅に疲れて坐っておられて、「水をくれ」と言われた。ここに全く予期せずして、彼女は実は神さまに出会っている。神さまの方からイエスという方を通してこの女に近づいて、神さまの方から声をかけて道を拓かれた。

対話というのは大事です。何かひとこと声をかける。そしたら心が開ける。話しているうちに、語り手の大事なものが流れ出ていく。そういう場面がこれです。全く偶然としか言う他ありませんが、これが神さまの摂理です。神さまの方でご用意なさって、この女にと思われたんでしょう。

●文化文明とは次元がちがう

この女が言っていることが面白い。キリストに対して、

「あなたは汲む物を持っていません。井戸は深いんですよ。ヤコブよりあなたは偉いんですか？」

と。確かにイエスは見すぼらしく見えたのかもしれない。私はこの問答の中に文化文明といったものの一つの徴のようなものを見る。今は文明文化が物凄く進んでいるから、その絢爛(けんらん)豪華さに対して、キリスト者は本当に素手(すで)、無手(むて)です。何もできない。また哲学やその他いろいろ人文の方でも、まずキリスト教といえば、否定してかかります。歴史もその他学問もみなキリスト教に敵対いたします。ところが、キリストはその上手(うわて)を行かれた。

「なるほど私は今、この井戸の水を汲んであげることはできない。今、パンをすぐに与えることはできない。今すぐあなたが求めている、この地上で一番欲しいもの、お金あるいはその他いろいろ、それをすぐに魔術師のように差し出すことはできない。だけども、私が与えようとしているものは次元がちがう。この水を飲む人はまた渇く。しかし、私が与える水を飲む人は永遠に渇くことがない。私が与える水はその人の中で湧き出て、永遠の生命に至る水の泉となるんだよ」

と。これがキリストが実は私たちに差し出してくださっているものです。確かにこの井戸の水なくしては、ヤコブも子孫も羊たちも生きてこれなかった。掛け替えのない大事な水です。それをイエス様はなにも否定なさっていない。

「それだけでは人間はだめだ、また渇く。井戸の水はいつか涸れ果てる。あなたの命もいつかは終りがくる。尊い命を養ってくれるこの水は尊い。しかし、その水に養われながら、その奥に永遠の生命の水を飲まなかったら、この人生は空しい」

と、キリストは言っておられる。

ここを間違わないでほしい。よく「宗教」と言いますと、なにか

「宗教は祈り三昧（ざんまい）でこの世のことはどうでもいい」

というふうに、あるいはこの世の事に全く無関心で、何も積極的なものを持たない。ただ彼岸に憧れてその日を待っている。そういう怠け者を作り出す阿片（あへん）のように誤解している人があります。そうではない。この生命の水がきたら、本当に積極的にこの地上での仕事に打ち込むことができます。何の憂いもなく、明日死ぬ身であっても、私は今日一日の命を神に在って燃焼する。そうしたら、それは永遠だ。明日があると思うな。今日一日、今この時に生き抜けよと。そういう生き方ができるんです。

「祈ることとは何か。働くこと（ラボラーレ）が即ち祈りだよ」

という。祈りとは三昧（ざんまい）ではない。いつもキリストに自分自身を投げ入れて、キリストに包まれて、そして地上の一歩一歩を踏みしめ歩いていく。歩くことが、働くことが祈りだ。今日一日をキリストと一緒に歩く。

「今日、汝、われと共にパラダイスなり」

と、あの十字架上の盗賊に仰った言葉のように毎日毎日、キリストと一緒に歩いて行く。

●永遠の生命の水

この永遠の生命の水というのは実は、この文化文明を底から担っているものです。花があります。その根っこが地下水に根を張ってそこから水を汲み上げて育っていく。キリストの霊水をいただいた者が文化文明を支える。それがなければ、その文化文明はどんなに一時的に栄えていても、必ず滅びていく。ローマも滅びたし、権力もその他絢爛たる文化も、もしそれが根っこを持っていなかったら、必ず滅びていく。

そういうことがこの対話で出ていると思う。また、私たちはどんなに仕事に熱中したり、いろんな生きがいを地上で持っていても、フッと空しくなることがありませんか。女の方だったら育児に専念している、学者は学問に打ち込んでいる。やっている時は本当に楽しい。キリストも何もないんです。だけど、それがあるとき終わったときに喜びと共にフッと空しさが出てきたりする。みんな渇く。この世の仕事、この世の生きがい、いろんなことに携わっていますと、いつか渇く。疲れる。そんな時に本当に安らぎがほしい、永遠のものがほしい。それをキリストが、

「私がそれを持っている。いや、私の中に神さまが泉して湧いてくださっている。私から生命の水が流れていくんだよ」

と。キリストは神さまに完全に明け渡しておられるから。だから、キリストが泉になってくださる。無私者、私無きひと。我執の無きひと、無我なるひと。罪無きひと。善も無きひと、無善者。何も無いひと、「神さまだけ」と言って生きていたひと。このキリストから生命の水が流れていく。

キリストは、荒野の試みに遭われた。あれは聖霊を受けられてから、荒野に導かれて四十日四十夜、獣だけが住んでいるような所で試みに遭われた。四十日の断食を終えられたとき空腹を覚えられた。飢餓の状態です。その時に試みる者がやってきて、

「あなたが神の子ならば、この石をパンに変えてごらん」

と。有名なところですね。キリストは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」

と。飢餓のどん底ですよ。もう少し続けば命はないかもしれない。そういうどん底で、肉体の限界をつぶさに味わわれた。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉、神の言葉、それで私は生きている」

神の言葉に神の霊がこもっています。神の言葉が霊となって火花する。その人の中で泉するんです。生命も何もかも全部、キリストは神さまに差し出しておられる。もうあそこから、キリストの献げは始まっている。あのゲッセマネを通って十字架に至るまで完全に、

「父よ、汝の御意(みこころ)を。あなたの聖意(みこころ)だけが私の食物です」

と、その貫きのキリスト、そういうお方でございます。

神さまは我々に生命(いのち)の水を下さる。この生命の水は、実は創造的な力を与えていきます。万物は神さまの創造に成っているんです、この大自然も。みんな神の作品なんです。

ヨハネ伝に書いてある。霊なるキリストが神の聖座にいらっしゃった。それが受肉して地にくだって来られた。我々罪びとと関わりを持って、我々を救わんがために、我々を天の生命に満たすためにくだって来られた。

●弟子たちの足を洗う

有名なあの最後の晩餐のところで、夕餉のあと弟子たちの足を洗われた。あの時代は裸足で歩いていますから、一番きたない僕の仕事をキリストは、フッと思い立ってなさった。手拭いを腰にまとって、盥に水を汲んで、一人一人の足を洗われた。キリストは馬槽に生まれられた、どん底の生まれ方をなさった。そして今、最後にまた奴隷の仕事をなさった。キリストこそは神の僕、本当に僕の姿です。神さまの僕である方はまた人の僕になられた。徹底的などん底の姿になられた。ペテロは、

「私は洗ってもらうのは要りません、畏れ多いから」

と。そうするとキリストは、

「もし、私がお前の足を洗わなかったら、お前と私はもう関わりはないよ」

と仰った。これが福音であります。本当にこちらの立派さではない。こちらの善さではない。こちらの立派さで天国へ行けるなら、たくさんの人が天国へ行ってます。キリストが来ることは要りません。天上で微笑んでおられたらよかったんです。ところが、

「義人なし、一人だになし」

というように、誰もおのが悟りで、おのが善行で、おのが信仰で救われない。そういう罪と死に気息奄々たる現世にキリストは降って来てくださった。足を洗ってくださった。

「足を洗うために来たんだよ、お前は要らんのか!?」

「はい、洗ってください！」

とペテロは本当に平伏してキリストに言いました。そういう関わり方です。

こういうキリストをいただきますと、私たちは本当に神の霊に貫かれて、私たちは甦っていきます。キリストの霊が私たちに宿りますと、本当に私たちは甦っていきます。

無条件でキリストが与えようとしてくださっているものを、無条件で「はいっ」といただく。それだけです。この女にだって、キリストは何も条件を付けておられない。

「もし、あなたが神の賜物を知り、また『水を飲ませてください』と言った人が誰であるかを知っているなら、あなたのほうから願い出たことであろう」

と。これはキリストに出会っているけれども、どなたかわからない

「もし、ここに立っている方がどなたであり、神さまは何を下さろうとしているか、そのことをもし知ったら、あなたのほうから願い出ただろう。そしたら、その人はあなたに活ける水を与えたよ」

と、それだけです。「願い出たら与えたよ」と言ってくださる。本当に有り難いですよね。

●十字架の蔭に泉湧きて

これはヤコブの泉を通してのお話ですけれども、本当の霊の泉はどこに湧いているか。それは十字架という場に湧いています。十字架という場がこの泉の湧く場なんです。

泉は清いでしょ。人を生かすこのヤコブの井戸も実に清澄な水が滾々と湧いている。清らかな水、それはどこに湧いているか。無色透明の水はどこに湧いているか。それはキリストの十字架の場、十字架でもってキリストはご自分を砕かれた。神さまに砕かれた。審かれた。私の罪を背負って、私のこの我執を背負って、私の呻きを背負って、十字架で砕かれ給うた。十字架でキリスト自身が砕かれ、私がそこに共に砕かれ、キリストも私もみな無くなった。そこに真清水が湧いた。

キリストは復活せしめられて、新しい霊体となって顕れ給うた。もはやそこに死もない、悲しみもない、新しい生命が燦然と輝いている。復活の朝です。そのキリストが天界に昇られて、弟子たちに

「お前たち、祈っておれ。やがて聖霊、助け主がくだって来る。この助け主が来たならば、お前たちは力を受けて、世の終りまで地の極までわが証人となれ」

と言われた。それが五旬節、ペンテコステ、聖霊降臨節で成就しました。その聖霊が実は泉なんです。泉の水なんです。湧く場は十字架であり、湧いている泉は聖霊だったんです。聖歌（396番）の1節に、

「十字架の蔭に泉湧きて、いかなる罪もきよめつくす。
おらせ給え、この身を主よ、十字架の蔭にとこしえまで。」

という歌詞がある。皆さん、無条件だと言いますと、

「いやぁ、私のような汚れた者が……」

と仰るかもしれません。そういう「私のような者が」というのが全部、十字架で片付けられているんです。さっきの「足を洗う」という、どろんこを洗ってくださった、それが十字架なんです。十字架の血が一切を清めてしまっている。

「もはや、汝は清し、罪なし。私が一切を片付けた。今は祈っていなさい。聖霊を上げるから。この生命の水を上げるから」

と。これが無条件の恵みです。無条件だと言いますと、無条件に受けとる人に無条件に下さる。これが聖霊の水なんです。その聖霊が光を発します。

詩篇36篇というのが選ばれております。その中にこういう一節がある。

**「5エホバよ、あなたの愛憐は天に漲り、あなたの信実は雲にまで及ぶ。……
7あなたの愛憐は貴い哉、ああ神よ！人の子はあなたの翼の陰に寄り添う！
8彼らは汝が家の脂で飽き足り、あなたは汝が愉楽の流水を彼らに飲ましめ給う。9そは生命の泉はあなたの許にあり、あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。」**（小池辰雄著作集第四巻『詩篇珠玉集』から、小池訳）

こんな素晴らしい句があります。この「生命の泉」の中に私たちが浴する道はただ無条件に、己自身をあるがまま、キリストの中に投げ入れる。祈りでもって投げ入れる。それだけだと。

●十字架と聖霊

ガラテヤ書2章20節に、

「我キリストと偕(とも)に十字架せられたり。最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生き給うなり」

とあります。御霊のキリストが私の中に生きてくださっている。そういう現実が必ずやって参ります。私は長いこと悩んできましたから、そしてまた信仰の道に入ってからも、「聖霊がほしい、聖霊がほしい」と思いながら、十数年悩んできましたから、今はっきりと皆さんどなたにでも証言できます。必ず主は下さる。必ず上から降(くだ)ってきて貫いてくださる。そして今度は、その人を通して流れていくんです、この泉は。必ず流れていく。

パウロは言ってくれた。コリント前書第1章26節から、

「26兄弟よ、召(めし)を蒙(こうむ)れる汝らを見よ、肉によれる智(かしこ)き者おおからず、能力(ちから)ある者おおからず、貴(とうと)きもの多からず。27されど神は智き者を辱(はずか)しめんとて世の愚(おろか)なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんとて世の卑(いや)しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」（コリント前1・26～28）

「肉によれる」というのは「生まれながらの」ということ。

つまり、この世で見捨てられた者、この世で渇いている者、この世で行き詰まっている者、悲しんでいる者、そういう者をキリストは探し求めて出会ってくださる。このサマリヤの女は実は渇いていたんですよ、魂が。彼女は身持ちもわるかった。だけれども、何か魂で求めていた。それを知って、神さまの方から近づいて来てくださった。私はそう思います。

「恵福(さいわい)なるかな、悲しめる者、その人は慰められん」

という山上のキリストの言葉があります。この地上で幸福の絶頂にある方、事業が成功して得意満面な方、いろんなそれぞれのお仕事で調子よく行っている人はあまりキリストのところに来ようとはしない。滑ったり転んだり躓いたり、挫折したり、病に倒れたり、命を懸けてきたものに裏切られたり、何か本当にもうどこへも持っていきようもないような、その悲しみの魂に実は「山上の垂訓」の言葉が、

「さいわいだよ、お前。私がお前の友ではないか。私はお前と関わりを持ちたいんだよ。今、この言葉が聞こえるね」

と、そう言って語ってくるのがあの山上の言葉です。だから、本当に悲しみの谷間で聴くべき言葉です。その時に聴いた言葉はいつまでも離れない。この神さまは公平な方です。この世で見捨てられた者、この世でうまくいかない者にいつも豊かな慰めを下さる。

このコリント前書第2章では、この世の智者に対してパウロは開き直っています。自分は智者が集まっているアテネでパウロは論陣を張ったけれども、みな聴いてくれなかった。それですっかり自信を喪失して、商売の町コリントへ出掛けるとき、もう破れかぶれで、

「キリストだけ。御霊のキリスト、十字架せられ給いしままのキリスト、もうそれ以外何も知らん」

と。これを引っ提げて行ったんです。

「4わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。5これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。」（コリント前2・4～5）

と、はっきりとこの世の文化文明に訣別しました。「神の言と神の力で」と言って。そしてコリントに教会ができました。実は「神の智慧は深いんだよ」と、6節から書いてます。

「人はこちらを知らない。しかし、こちらは神さまに知られ、一切を見る光が与えられる。人に知られていないようで、実はその人は神に知られ、神によって輝いている。倒されぶっ倒されているようで、実は神さまは立たせてくださっている。弱いようで、実は強いんだ、誰よりも強いんだ」

と。そういうことをパウロはコリント書の中で随所に書いてくれています。だから、このパウロという器は、私たちにとって本当に励ましです。

●永遠の生命をいただく

ヨハネ伝の7章を見ます。37節から、

「37祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」39イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている〝霊〟について言われたのである。」（ヨハネ7・37～39）

はっきりとここで、

「その人の中から生ける水の川が豊かに流れ出ていく」

と。キリストは生命の泉でした。みんなにその泉を差し出して、水を飲ましてくださった。

「その水を飲んだ者は死なない。永遠の生命をいただく」

と。本当に死なない。キリストのように羽ばたいて天界に行きます。のみならず、この地上でその人自身が今度は泉とされる。そして、苦しんでいる人や困っている人に流れて行く。本当に流れていくんです。

ヨハネの黙示録というところにまたこの「泉」のことが出てきます。最後の世界をヨハネが幻で示されたところですが、21章1節から読んでみます。

「1我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。2我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。3また大

なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、4かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』5かくて御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き記せ、これらの言は信ずべきなり、真なり』6また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。7勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。』（黙示録21・1～7）

こういう終末の世界が描かれています。これは最後の世界ではありますけれども、実はこういう世界を私たちは味わっています。こういう世界が今、私たちの中に既に泉して湧いています。それがやがてかの日に完成しますけれども。本当にそうなんです。私たちは、地上では戦いがあります、涙があります。苦しみがあります。しかし、その中にあって実にこのキラキラ輝いているものをキリストは下さっています。

私たちは本当に何者でもありません。どの派にも属しません。ただ私たちはこの新約聖書が証言しているこの福音の現実、使徒行伝、そして使徒たちの書簡、そういったところに溢れているこの聖霊の現実。ユダヤ人も異邦人もない、男も女もない、奴隷も自主もない。人はみな神の子だと。神さまは救おうとしてなさっている。そういう尊い器です。この一人ひとりの中に神さまはキリストという宝を与えようとして呻いておられる。

「御霊言い難き呻きをもて執り成し給うなり」

と。天界のキリストはご自分の霊を聖霊という姿で私たちに送ってくださった。そのお方が天界のことを教えてくださる。

「御霊をいただいたら、誰にも教えてもらわなくても、御霊自身が教える」

と書いてあります。それがパウロが「霊」と言っている事態なんです。キリストも、

「神は霊だ。礼拝する人も霊と真をもって拝しなさい。この山でもあの山でもない。エルサレムでもゲリジブの山でもない。」

「霊と真をもって」と言う。あなたのいるお台所が礼拝の場だ。あなたのいる働いている場が礼拝の場だ。そこで『主さま！』と祈りながら、キリストに全托して、歩いているところ、そこにキリストの御霊が臨み、あなたと一緒に旅してくださると。こういった現実が、私は本当に正真正銘、皆さんに告白したい現実なんです。